

文化と教育をつなぐ―

唱歌教育史、教育運動、生活記録研究はもとより、
日の丸・君が代問題、教科書裁判、
さらに広く文化と教育のあり方を追求した、
山住正己……

戦後教育学に強靱な美しさを放つ、
山住のエッセンスを浮き彫りにする！

子どもの
音楽教育

日本近代教育思想の
求めて

近代日本教育史研究

教科書問題

日の丸・君が代・教育勅語

文化と教育をつなぐ

教育にとって教養とはな

達に学び、教育の

未来を想う

編集・解説◎佐藤広美

山住正己著作集

全8巻

●学術著作集ライブラリー



発行・学術出版会
発売・日本図書センター

単著はもちろん、雑誌、 資料集の解説まで、広く収録！ 山住の仕事の全体像を 8つのテーマから再構築する

特色

1 文化と教育をつなぎ、戦後教育学に大きな足跡を残した山住正己、待望の著作集！

唱歌教育研究、日の丸・君が代問題、教科書裁判、さらに広く文化と教育のありかたを追求し、戦後教育学に強靱な美しさを放つ、山住正己のエッセンスをまとめた、はじめての著作集！

2 その多彩な業績を、8つのテーマにまとめて望見！

「子どもと音楽教育」「日本近代教育思想」「日本近代教育史」「教科書問題」「日の丸・君が代、教育勅語」「文化と教育をつなぐ」「教育にとつての教養」「先達に学び、教育の未来を想う」の8つのテーマから山住の全体像を浮かび上がらせます。

3 唱歌教育成立過程の研究をはじめとする単著のみならず、解説、時評等を広く収録！

『唱歌教育成立過程の研究』『教科書』『教育勅語』『中江藤樹』などの代表的著作はもちろん、講座、資料集、文庫等における解説や、新聞時評、講演から重要論考を収録。

4 山住正己の軌跡、その今日的意義を明かす！

山住正己に師事してきた、東京家政学院大学・佐藤広美による解説（第8巻収録）は、山住正己の多岐にわたる業績を概観、山住の仕事、その鋭い歴史的感性が現代の教育学に与える重要性を考察する。山住退官時までの略歴と著作目録も再録。

刊行にあたって

佐藤広美

戦後の教育学をふり返るとき、勝田守一（一九〇八―一九六九年）を第一世代とすれば、山住正己（一九三二―二〇〇三年）は第二世代に属する。第二世代にあつて、文字通り戦争の後の戦後教育学はどうあるべきかを問い続け、実際の教育現場で起きた問題を重視し、それを歴史的に解くことをつねに心がけ、文化の視点で本質を見極める、そのような学問を志した。それが山住の他に例を見ない、すぐれた特質だったのではないか。

山住の教育学は、輪郭のはっきりした三つの著作群に大きく区分することができ。第一は子どもの歌と音楽教育であり、これはさらに芸術教育へと広がりをもせていった。『唱歌教育成立過程の研究』（第1巻収録）や『子どもの歌を語る』がその代表であろう。山住は、自ら歌を愉しみ、子どもの歌を通して日本の近代と教育の本質に迫った。音楽と絵画、文学や演劇。芸術教科に関心をもつ方々にぜひおすすめしたい。

第二は、近現代を中心にする（ときに日本中世に遡る）日本教育史の問題。山住の教育史研究は概説風の叙述にある退屈さを感じさせない「問題史」であった。神々は細部に宿る。山住は問題の細部にこだわり、個別的なもの、具体的なものに、だれにも真似のできないほど細やかな愛着を注ぎ、一つひとつの事実を自分の眼で吟味し、遺産をして自ら語らしめる、そのような構えを貫いた。歴史に学ぶこのような謙虚さは「述べて作らず」という姿勢を形成し、『中江藤樹』（第2巻収録）や『教育の体系』（第3巻収録）『教育勅語』（第5巻収録）に結実していく。

山住がとくにこだわり続けた問題は「戦争と教育」であった。「若い人たを戦場に送り出す教育は、何度でも問題にする」（『日本教育小史』）。山住教育史研究の大切な特徴であろう。平和と教育、民主主義と教育を考えようとするみなさんにぜひ読んでいただきたい。若い教育研究者はこの山住教育学の意義を明らかにしてほしいと願っている。

そして第三は、文化と教育に関連する諸問題。文化と教育をつなぐことを大切にしたい山住にとって、最大の課題は教科書問題であった。「政府に決めてもらうのではなく」（『教科書』第4巻収録）、国民一人ひとりが教科書に関心を示し、政府への依頼心を克服し、個性ゆたかな文化の創造（教育基本法、一九四七年）をになう精神の自由を獲得すること、山住はそれを求め続けた。ときに、権力による思想統制（愛国心など「気分の方向付け」に誰よりも早く反応し、それに文化と人間の自律性を対置した（『日の丸・君が代問題とは何か』第5巻収録）。学校とは何か、教科書とはどうあるべきかを考える教育関係者に手にとっていただきたいと思う。

山住の教育学は、多くの人びととの交流の成果であった。民間教育研究運動団体の一つ教育科学研究会（委員長）、教科書問題を考える市民の会（事務局長）、そして職場の東京都立大学（総長まで務める）に集う人びととの時間の共有が、なにより好きだった。山住はそこで問題を教えられ、それを解く教養を形成した。先達・友人の追悼文ばかりを集めた『点鬼簿』（第8巻収録）はこうして生まれた。

山住の著作は膨大であり、刊行された本のすべてはとも収載できなかった。全8巻におさめた著作から、山住の三つの輪郭を浮かび上がらせることができれば幸いである。

（さとうひろみ／東京家政学院大学教授）

第1巻 歌を愉しみ、教育を考える
子どもの歌と音楽教育

■「唱歌教育成立過程の研究」……東京大学出版会 一九六七

■「教育音楽」からの解放／戦後音楽教育の出発点／子どもの生活と音楽教育／替え歌・荒城の月・現代音楽／教師の音楽観、教育観……『音楽と教育』教育科学選書 国土社 一九六六

第2巻 述而不作、信而好古
日本近代教育思想の源流を求めて

■「中江藤樹」朝日評伝選17……朝日新聞社 一九七七

■「近世における子ども観と子育て」……大田堯ほか編『岩波講座子どもの発達と教育2』子ども観と発達思想の展開 岩波書店 一九七九

第3巻 若者を戦場に送り出す教育は何度でも問題にする
日本近代教育史研究

■「近代日本の芸術教育」……加藤周一ほか編『日本近代思想体系6』教育の体系 岩波書店 一九九〇

■「敗戦直後の教育改革」……堀尾輝久・山住正己共編『教育理念（戦後日本の教育改革）』東京大学出版会 一九七六

第4巻 教科書問題

■「教科書」岩波新書……岩波書店 一九七〇

第5巻 日丸・君が代、教育勅語

■「日丸・君が代問題とは何か」……大月書店 一九八八



第6巻 文化と教育をつなぐ

■「文化と教育をつなぐ」……『大学で教育と文化を語る』東京都立大学総長発言集 エイデル研究所 一九九五

■「文化の変容と子どもの発達／読み書き文化と子どもの発達」……大田堯ほか編『岩波講座子どもの発達と教育1』子どもの発達と現代社会 岩波書店 一九七九

第7巻 教育にとって教養とはなにか

■「教育にとって教養とは何か」……『教育内容と日本文化』青木教育叢書 青木書店 一九七七

第8巻 先達に学び、教育の未来を想う

■「先達に学び、教育の未来を想う」……『教育史に学ぶ』新日本新書 新日本出版社 一九八一

若い人たちを戦場に送り出すことを当然とした教育は、何度でも問題にしなければならない
文化の視点から本質を見極める、山住正己の教育学に迫る！

二学年上の厳い先輩だった。「唱歌教育成立過程の研究」(東京大学出版会、一九六七年、第一巻収録)が氏の処女著作だった。基礎になったのは伊澤修二関係史料や東京音楽学校の文書等である。今なら地方文書や大学アーカイブズ文書として比較の容易に接近できるが、当時はなかなかアプロウチできなかった。しかしそれらを基礎に肉迫して研究によって、氏は、新制東京大学の教育学博士第一号になった。教育の「時事問題」に関する華々しい発言を始めたのはその後である。

第一は、教育行政当局の専横に対する批判をおこならない、ということである。一九六〇年代初め以降、三〇年余り続いた教科書裁判に献身的に関与し、そのかたわら『教科書』（岩波新書一九七〇年、第四巻収録）という好著を書いた。のちには「文部省廃止論」（『世界』一九八二年一月号初出、第六巻収録）も話題を呼んだ。アカデミックな修練の上に展開される現代的発言の見本のようなものだったと思う。

(てらさき まさお／東京大学・立教大学名誉教授)

今日、日本に於て音楽となつたかと思ふところ、明治以来、ほとんとすべての日本人が歌を唱へてゐる。昔來宗教などにもあつたやうな問題にならなければならぬ。その音楽教育は、明治十九年（一九二六）民権学校定足とともに芸術科音楽となり、監修や鑑賞の指針がおこなわれるようになるで、明治四十（一九二七）以後、以て小学校では唱歌科として、中学校では唱歌科と併合されてはゐる。

「さうだ」と、保岡、幼稚園、小学校低学年の子もまたは、「有聲で、ひらいて、手打って、行す」や、「もうちう、もうちう、まのまゝ」とも、「……」といた、学校卒業していく一般生が「おちちは、たいどき光るといふこと、これでの原由は、日本人がすぐく目な歌である、日本人は、俗にもおもへてゐるが、これも明治十三年からメロディを採りて日本人につけた西ノリといふ歌謡は、「有聲で、ひらいて、手打って、行す」といふことが、見受け止む所、花をききながら、こころの鳴きが日本人のあいだにあらわれてゐる。それはちがうものであるが、学校の音楽といふことも、これらの影響が日本人のあいだにあらはれてゐる。そればかりではない、西洋古典曲から現代にいたる芸術音楽をなくしてゆく人たちがあらはれつつあるに似たり、日本人の音性はあたりにあつて、軍楽隊、キリスト教、学校といふ三つの通路があつたよするは、明治初期の西洋音楽輸入にあつて、

はじめに

三

「不思議な生きもの」としての教科書
——復刻版『図説』を読む

[illegible]

文化と教育をつなぐ研究

梅原利夫

山住先生の研究は、出発点である「唱歌教育成立過程の研究」(第1巻収録)に凝縮されている。本書は、新制の東京大学教育学系大学院が授与した教育学博士第一号の論文である。そこには、音楽教育と教育史と教科教育の三つの系がクロスして論じられている。以後の仕事は、ちょうどこの三つの系を扇の要として、文化研究、歴史研究、そして教育研究へと、それぞれが縦横無尽に広がっていったように、私には捉えられぬ。

この山住正己著作集に収められた作品は、一九六〇年代半ばから二〇世紀末までのものである。作品のすべてから、「文化と教育」が直面していたそれぞれの時代の歴史的課題に、何とか応えようとしていた問題意識を読み取ることができる。著者は、自由闊達な討論の場やサロンを何よりも大事にし、その対極にある権力による抑圧や強制に身体をはって抗し続けた。この時期の仕事や発言の多くは、主に教育科学研究会(終生会員、事務局長から委員長へ)と東京都立大学(助教授から教授、学部長から総長へ)と教科書問題を考える市民の会(代表格)に誠実に関わる過程で生み出されたものである。このようにして「文化と教育をつなぐ」(大学最終講義の演題)営みに人生を費やした。

著者は、人間の内面に醸成される教養の重要さに注目していた。そうした教養とは、時代の課題と向き合い、格闘しながら、他者とともに学び合うなかで耕されていくものであろう。そのため読書をよくなく愛し、エッセイを書くことを楽しんでいった。日本酒を好み、酒席では合唱の指揮棒を振り、原稿用紙に文字を埋めることを無上の喜びとした。

このたび、著者の指導を受けて博士論文を完成させた佐藤広美さんによって、著作集が編まれ、意欲的な解説が書かれることになった。魅力的な企画であり、大いに期待したい。

(うめはらとしお／和光大学教授)

期待したい。
(うめはらとしお／和光大学教授)

山住正己著作集

教育史、音楽教育、教育運動史、教育学（法、政策、制度）、教科書問題、教育原理、文化史、現代史等の研究者／大学・公共図書館／教育と文化に関心のある方々

東京都出身。1960年、「わが国初等教育における唱歌教育成立過程にかんする研究」で、新制・東大の教育学博士第一号に。1972年より、東京都立大学人文学部助教授、教授、同総長を勤める。教育科学研究会、教科書問題を考える市民の会でも活躍。本著作集収録以外の著書に、『戦争と教育：四つの戦後と三つの戦前』（1997）、『日本教育小史：近・現代』（1987、どちらも岩波書店）など。

第1巻	学校管理運営の組織論／専門職としての教師（新版）
第2巻	教育行政の理論と構造
第3巻	生涯教育の理論と構造（ほか）
第4巻	未来形の教育
第5巻	教育の私事化と公教育の解体
第6巻	未来形の大学
第7巻	教育の財政と経済（新編集）／略年譜・主要著作目録

T160513